

第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

ヤオ族の儀礼文献には、儀礼神画に描かれる神々の容貌や服飾などについて描写する記述が見られる。本章では、請聖書・賞光書というジャンルの儀礼文献に収められたこうした記述に注目し、その内容を分析することによって、儀礼文献に記述された神々の容貌や服飾などの特徴が儀礼神画に描かれていることと一致するかどうかについて明らかにする。

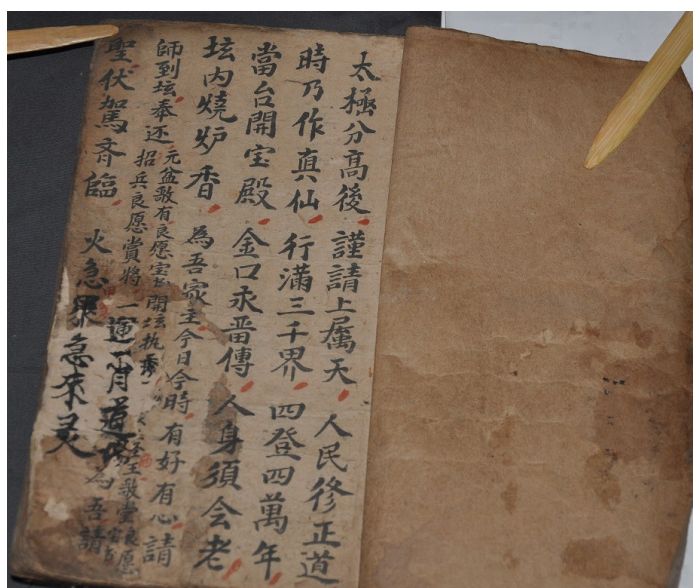
第1節 請聖書と賞光書について

ヤオ族が行う儀礼において、儀礼文献は不可欠なものである。儀礼で使用される儀礼文献には、通過儀礼に関する写本、儀礼に用いる文書類、神々を崇拜する神歌に関する写本、神々の呪文に関する写本、符、罡歩、手訣に関する写本、吉日を選ぶ暦、宗教職能者の受礼状況を記したもの等が含まれ、それらの内容から賞光書・伝度書・請聖書・意者書・歌堂書・超度書・暦書に分類できる[神奈川大学歴民調査報告第12集『中国湖南省藍山県ヤオ族儀礼文献に関する報告I』2011: iii]。そうした分類における請聖書と賞光書には、様々な神を描写する歌が多く見られる。本節では、この二つのジャンルの儀礼文献がどのようなものなのか、どんな儀礼に用いられ、またどのような内容が記述されているのかについて紹介する。

写真8・9で示したように、請聖書と賞光書は、いずれも手書きの写本であり、縦書き、毛筆で記されている。



〈写真8〉 請聖書の表紙ⁱ



〈写真8-1〉 請聖書の第1頁



〈写真9 賞光書の表紙²⁾〉



〈写真9-1 賞光書の第1頁〉

張勁松によれば、請聖書には呪語が多く記されているため、「呪書」とも称されると述べ、また儀礼を担当する祭司たちが請聖儀礼³⁾を行う際に使用する主要な文献であるとする[張ほか2002: 215]。賞光書は、また「上光書」とも呼ばれる。その理由は上光儀礼⁴⁾を行う際に使用する儀礼文献であるからである。湖南省永州市藍山県過山系ヤオ族(ミエン)の度戒儀礼と還家願儀礼の程序から、それぞれの儀礼が行われる際に、これらの儀礼文献は祭司によって読誦されたことが確認できた⁵⁾。

2011年3月と2012年3月に、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科より発行された、神奈川大学歴史調査報告第12集・『中国湖南省藍山県ヤオ族儀礼文献に関する報告Ⅰ』と神奈川大学歴史調査報告第14集・『中国湖南省藍山県ヤオ族儀礼文献に関する報告Ⅱ』には、神奈川大学ヤオ族文化研究所所蔵の儀礼文献の目録が載せられている。そこから湖南省藍山県で行われた度戒儀礼と還家願儀礼の際に用いられた複数の請聖書(A-11、A-16b<Z-20>、A-18、A-22、A-31、A-32a、Z-18)と賞光書(A-19、A-30a、Z-16<Z-27>、Z-23、Z-24)が見られる。これらの請聖書・賞光書には、神面に描かれる神々を含め、様々な神について記述し、そして讃えるための呪文や歌などが収められている(別冊「付録」参照)。また、同じジャンルの文献資料は、2014年3月に出版された、神奈川大学歴史調査報告第17集・『南山大学人類学博物館所蔵上智大学西北タイ歴史文化調査団収集文献目録』⁶⁾にも見られる。本論では、専ら湖南省永州市藍山県の祭司が持っている請聖書及び賞光書に収められている、儀礼神面に描かれる神々を描写する記述を主なる資料として取り扱うが、補足として上智大学西北タイ歴史文化調査団が収集した資料も取り扱っている。

第2節 儀礼文献に収められる神画に描かれた神々に関する記述

本節では、請聖書及び賞光書に収められている、儀礼神画に描かれていた元始天尊、靈寶天尊、道德天尊、玉皇、聖主、張天師、李天師、天府、地府、大海旛、海旛張趙二郎、三將軍、太尉などの神々を描写する呪文や歌などの資料を提示し、内容を明らかにするため翻訳を行い紹介したい。その理由として、これらの呪文や歌などの内容には、神画に描かれる神々の生年月日、誕生時刻、服装、持物などが記されているためである。本節では、これらの呪文や歌に記述された神々が、神画においてはどのように描写しているのか、記述と描写から見た神々の容貌や服飾などの特徴が一致するかどうかを明確にする。

以下に神画に描かれる主要な神々についての呪文や歌などの録文と翻訳を付し、分析を加える。録文文中の「■」は読解不明箇所である。

第1項 「混沌歌」から見た神画に描かれる神々

「混沌歌⁷」は、1971～1972年に、上智大学西北タイ歴史文化調査団がタイ西北部に居住する過山系ヤオ族(ミエン)地域から収集した請聖書・賞光書のジャンルの儀礼文献に収められている歌である。この歌には、混沌の中から天地が開闢して様々な神が誕生するという内容が記されている。歌に記される神々の名称を見ると、儀礼神画にも描かれている神々は殆どが混沌から誕生してきたことが分かる。特に、「混沌歌」の内容には、神々の生年月日、誕生時刻などのことまでも記されているため、儀礼神画に描かれる神々を一層理解することができる非常に重要な文献資料であると考えられる。このような内容の歌は、湖南省永州市藍山県の祭司が持っている請聖書及び賞光書の中には見られないので、取り上げたい。その内容は次のように記述されている。

「混沌歌」

混沌初開分天地	混沌 ⁸ から初めて天と地が開き分れた。
何羅 ⁹ 世上並無人	世の中に人がいない。
陰陽未分是朦朧	陰と陽が分れず朦朧としている。
並無日日照凡間	世間を照らす日と月もない。
寅卯二年洪水発	寅卯2年に洪水が発生した。
陰陽未到暗朦朧	陰と陽が分からず、暗くはつきりと見えない。

盤古の天地開闢¹⁰の神話伝説と同様に、「混沌歌」の内容から、ミエンでも混沌から天地が切り拓かれたことによって生成したという話が見られる。文中の「混沌初開分天地」「何羅世上並無人」「陰陽未分是朦朧」「並無日日照凡間」「陰陽未到暗朦朧」というように、天地が切り拓かれていない時は、陰陽・人間・日・月がなく、いずれもはつきりしない混沌の状態であった。

第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

高皇置 ¹¹ 天経立地	高皇は、天を設立し、地を立てる。
平皇出世置龍宮	平皇は出現し、龍宮 ¹² を設置する。
盤王出世無衣着	盤王は出現し、着る衣が無く、
唐皇出世置衣縫	唐皇は出現し、衣裳を縫い作る。
置得人民無錢使	人民を作ったが、使う錢が持っていない。
出世唐皇来造錢	出現した唐皇は錢を造りにくる。
出世凡人無有火	人民が出現したが、火が無い。
帶男帶女暗中蔵	息子と娘を連れて暗い所で身を隠した。
出世皇置出竹火 ¹³	出現した某皇は火を作る。
臨時置出火光明	この時に火を作り出して光明になる。
上界置有陰陽聖	天上界に、陰・陽・聖を設置する。
龍皇號法投経同 ¹⁴	龍皇は法を大声で叫び、経典を入れた筒を投げる。
萬々聖主不敢話	神々は恐れて話すことができない。
當天取法教師童	天で法を取って師童に教える。
紅藍赤黒無人着	紅色・藍色・赤色・黒色の服を着る人はいない。
草鞋踏破變成虫	草鞋を履き破れて虫になる。
天上日月置一聖	天上の日月は聖筭を作る。
天車召轉月陰陽	天車は月を召転し、陰陽ある。
未分日月照天下	未だ世界を照らす日と月は未だ分れていない。
置成日月照凡間	日と月を作り上げ、世間を照らす。

この段落は、宇宙の誕生について説明している。「高皇置天経立地」とは、高皇は天を設立し、地を立てた。「唐皇出世置衣縫」「出世唐皇来造錢」とは、唐皇は衣服と錢を作り出した。「出世皇置出竹火」とは、火を作り出した。さらに、「上界置有陰陽聖」とは、天上界において陰・陽・聖を設置した。「天上日月置一聖」「置成日月照凡間」とは、日と月を設置し、光明を作り出した。その次に、神画に描かれる神々が登場する。

三寶出在清 ¹⁵ 雲内	三寶は青雲の内に生まれた
化身至在大清宮	化身は大清宮に至る。
年庚生在混沌歳	混沌の時に生まれる。
號為三寶大天尊	號は、三寶大天尊と称す。

文中の「三寶」は、三清の元始天尊・靈寶天尊・道德天尊を指していると考えられる。三神とも混沌の中から生まれ、「大清宮」という所において、三神のことを合わせて「三寶大天尊」と称される。その次に、元始天尊について詳しく記述される。

第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

元始出世庚辰歳	元始は庚辰年に生まれる。
二月十五正寅中	2月15日にちょうど寅の刻に生まれる。
勅令金盃頭上帯	勅令の金盃を頭に被る。
手拿宝鏡照天宮	手に宝鏡を持って天宮を照らす。
身着黒衣坐龍殿	身に黒色の衣を着て龍殿に座る。
脚踏蓮花 ¹⁶ 朶朶雲	脚は蓮の花のような雲を踏む。
得道法高龍虎伏	道を得て法が高くなり、龍と虎が伏す。
號為元始大天尊	號は元始大天尊と称す。

文中の「元始出世庚辰歳」「二月十五正寅中」により、元始天尊は庚辰年2月15日寅の刻(3-5時)に生まれたと分かる。また「勅令金盃頭上帯」「手拿宝鏡照天宮」「身着黒衣坐龍殿」「脚踏蓮花朶朶雲」から、元始天尊は、勅令金冠を冠り、手に宝鏡を持ち、黒色の衣を着、蓮の花のような瑞雲を踏むという特徴が読み取れる。「勅令金冠」は、元始天尊は勅令者であることを象徴しているだろう。さらに「得道法高龍虎伏」から、元始天尊は龍と虎が伏すほど法力が高いことが読み取れる。これらの字句から見た元始天尊の金冠を冠り、黒色の衣を着るという特徴は、神画に描かれる元始天尊の冠物及び着物の色と一致している。

元始天尊の次に、靈寶天尊のことが記述されている。

靈宝生在甲子歳	靈宝は甲子年に生まれる。
正月十五是寅時	正月15日寅の刻である。
勅令金盃頭上戴	勅令の金盃は頭に冠る。
脚踏蓮花五色雲	脚は蓮の花のような五色の雲を踏む。
身着藍衣在龍殿	藍色の衣を着て龍殿に居る。
太陽火扇扇開花	太陽のような火の扇子で扇いで花を咲かせる。
羅沙保 ¹⁷ 扇手中立	羅紗宝扇を手に縦に持つ。
號為道德大天尊	號は道德大天尊と為す。

文中の「靈宝生在甲子歳」「正月十五是寅時」から、靈寶天尊は甲子年1月15日寅の刻(3-5時)に生まれたと読み取れる。「勅令金盃頭上戴」「脚踏蓮花五色雲」「身着藍衣在龍殿」「羅沙保扇手中立」とあることから、靈寶天尊は、勅令金冠を冠り、蓮の花のような五色の瑞雲を踏み、藍色の衣を着、扇子を持つことが分かる。しかし、本論の第4章での神画に描かれた内容の読み取りによって、藍色系の服を着、扇子を持つという特徴を持っているのは道德天尊であり、靈寶天尊ではない。かつてこの段落の最後に「號為靈宝大天尊」を書くはずなのに、「號為道德大天尊」という字句が書かれていた。

その次には、玉皇のことが記されている。

第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

玉皇身着黄衣段	玉皇は黄色の衣を着る。
生在己酉正月中	己酉年正月に生まれる。
十九寅時降下段	19日寅の刻に生まれる。
手拿芽簡不离胸	手に圭を持って胸から離さない。
頭戴平天朱羅帽	頭に平天朱羅帽を冠る。
脚踏青雲朵朵紅	脚に青色や紅色の雲を踏む。
心中法令千般聖	心中の法令は千種あり、神聖である。
除邪現正玉皇公	邪悪を駆除して正義を正すのは玉皇である。

この段落の「生在己酉正月中」「十九寅時降下段」により、玉皇は己酉年1月19日寅の刻(3-5時)に生まれたことが読み取れる。「玉皇身着黄衣段」「手拿芽簡不离胸」「頭戴平天朱羅帽」「脚踏青雲朵朵紅」という字句から、玉皇は黄色の衣を着、手に圭を持って胸の前に置き、頭に冕を冠り、青色紅色の瑞雲を踏むといった特徴が分かる。ここから見た玉皇の衣の色、姿勢、持物、冠物は、神画に描かれた玉皇と一致する。また、文中の「心中法令千般聖」「除邪現正玉皇公」から、玉皇は法令を銘記し、邪鬼を滅ぼし、正義を正すという性格が強く現れている。

その次には、聖主のことが記されている。

聖主身着黑衣緞	聖主は黒色の衣を着る。
生在陰府丁卯中	陰府で丁卯年に生まれる。
七月十五降下殿	7月15日に生まれる。
朝天芽簡不离胸	笏を天を向いて胸から離れない。
法令千般邪鬼伏	法令は千種あり、邪鬼を伏す。
號為聖主大天尊	號は聖主大天尊と為す。

聖主を描写する段落の「生在陰府丁卯中」「七月十五降下殿」の字句から、聖主は丁卯年7月15日に陰府(冥界)で生まれたと読み取れる。7月15日(旧暦)は盂蘭盆節である。この日に生まれることは、聖主が幽冥から誕生した性格を強調しているだろう。また、文中の「聖主身着黑衣緞」「朝天芽簡不离胸」により、聖主は黒色の衣を着、手に圭を持って胸の前に置く特徴が分かる。黒色の衣を着ることも幽冥を象徴していると考えられる。衣の色と圭を持つ姿勢は、神画に描かれる聖主と一致する。

その次に、天府、地府、陽間、水府が記されている。

天府身着紅衣緞	天府は紅色の衣を着る。
生在戊卯五月中	戊卯年5月半ばに生まれる。
十五午時降下殿	15日午の刻に生まれる。
朝天芽簡不离胸	笏を天を向いて胸から離れない。

第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

地府身着衣黒緞	地府は黒色の衣を着る。
生在己卯六月中	己卯6月に生まれる。
陽間身着衣紅緞	陽間は赤色の衣を着る。
生在卯辰三月中	卯辰年3月に生まれる。
十五寅時降出世	15日寅の刻に生まれる。
脚踏蓮花朵朵紅	脚に紅色の蓮の花を踏み。
水府身掛緑衣段	水府は緑色の衣を着る。
生在甲午九月中	甲午年9月半ばに生まれる。
初七午時降出世	7日午の刻に生まれる。
天平 ¹⁸ 金帯起雲雲	天平を冠り、金の帯を付け、雲から現れる。
朝天芽簡胸前立	笏を天を向いて胸の前に縦に持つ。
照下南山十八春	南山十八春を照らす(意味不明)。
都是老君教京 ¹⁹ 道	経典と道は全て老君から教えてもらった。
流傳度法供香門	世の中に広く伝わり、法を伝度し、祭壇に供える。

天府の部分から順番に説明していく。文中の「生在戊卯五月中」「十五午時降下殿」により、天府は戊卯年5月15日午の刻(11-13時)に生まれたと読み取れる。「天府身着紅衣緞」「朝天芽簡不離胸」の字句から、天府は、紅色の衣を着、圭を持って胸の前に置くという姿勢であると分かる。

それから、「地府身着衣黒緞」「生在己卯六月中」の字句から、地府は己卯年6月に生まれ、黒色の衣を着ると読み取れる。

その次は、陽間のことが記されている。「生在卯辰三月中」「十五寅時降出世」という字句から、陽間は卯辰年3月15日寅時(3-5時)に生まれたことが分かる。また、「陽間身着衣紅緞」「脚踏蓮花朵朵紅」により、陽間は赤色の衣を着、紅色の蓮の花を踏むと読み取れる。

陽間の後に、水府が出てくる。「生在甲午九月中」「初七午時降出世」の字句から、水府は甲午年9月7日午の刻(11-13時)に生まれたことが分かる。「水府身掛緑衣段」「天平金帯起雲雲」「朝天芽簡胸前立」の字句から、水府は緑色の服を着、帝王を象徴する冕を冠り、金の帯を付け、圭を持ち、瑞雲の中から現れる様子が見られる。

これらの天府、地府、陽間、水府の四神に関する描写から、四神の生年月日と生まれ時刻が分かるばかりでなく、四神を区別できる衣の色を把握することもできる。しかし、本論の第4章でこの四神が描かれる天府神画と地府神画に描かれる内容の分析によって、神画に描かれるこの四神の衣は多色であり、衣服の色で神の身分を判断するのは非常に困難である。しかも、四神とも同式の冕を冠り、同一の姿勢であるので、見分けるのは一層難しくなる。

その次に、張天師に関することが記されている。

張天出世庚辰歳	張天は庚辰年に生まれる。
---------	--------------

第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

二月初九是午中	2月9日の真昼である。
一身便着紅衣緞	身に紅色の衣を着る。
八卦金衣色色紅	八卦の金衣を着て、色は紅色である。
手拿芽簡教法會	手に笏を持って法をできるように教える。
諸般法會尽通傳	諸々の法が全てでき、伝授する。
頭戴金冠所上坐	頭に金冠を冠り、所の上に座る。
脚踏羅鞋五色雲	脚は羅靴を履き、五色の雲を踏む。

文中の「張天出世庚辰歳」「二月初九是午中」の字句から、張天師は庚辰年2月9日の昼に生まれたことが読み取れる。また「一身便着紅衣緞」「八卦金衣色色紅」「手拿芽簡教法會」「頭戴金冠所上坐」「脚踏羅鞋五色雲」などの字句から、張天師は紅色地の八卦模様の衣を着、圭を持ち、金冠を冠り、羅靴を履き、瑞雲を踏むという姿が読み取れる。この様子は神画に描かれる張天師の姿と一致している。「諸般法會尽通傳」とは、張天師は諸々の法ができる法力が高い者であり、また法の伝授者の立場に立っていることが強く現れている。

その次は、李天師の描写がある。

李天身着黒衣緞	李天は身に黒色の衣を着る。
脚踏烏龜及青蛇	脚は亀及び青色の蛇を踏む。
除邪宝劍身辺立	邪鬼を駆除する宝劍を身の横に立てる。
北方壬癸是灵神	北方壬癸の靈神である。
戊子年間降出世	戊子年に生まれる。
五月十五是寅時	5月15日寅の刻に生まれる。
出世無兄又無弟	生まれてから兄弟がいない。
投天教法上天宮	天に頼っていき、天宮へ行き、法を教える。

文中の「戊子年間降出世」「五月十五是寅時」により、李天師は戊子年5月15日寅の刻(3-5時)に生まれたことが分かる。「李天身着黒衣緞」「脚踏烏龜及青蛇」「除邪宝劍身辺立」の字句から、李天師は黒色の衣を着、亀及び青色の蛇を踏み、体の横に邪鬼を滅ぼす劍が立てられているという特徴が見えてくる。ここから見た李天師の衣服の色は、神画に描かれることと一致する。しかし、体の横に立てられる劍や亀と蛇を踏むことは、神画に描かれないパターンや描かれるものもある。

また、文中の「北方壬癸是灵神」とは、李天師は北を司る神であるという性格を強く現していると考えられる。北を司る神といえば、亀と蛇の絡み合った図像の玄武がイメージされる。文献記述から見た李天師は玄武と同じように亀と蛇を持つことによって、李天師は玄武の化身ではないかと推断する。さらに、北を象徴する色は黒色であるが、黒色の衣を着る李天師は間違いなく北を司る神であると考えられる。

第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

また、最後の「出世無兄又無弟」「投天教法上天宮」という字句から、李天師が神になる経緯が述べられ、また法術を教える神とする性格も見られる。

その次に、元帥神らが登場する。

把壇鄧師朝上坐	把壇鄧師は朝廷に座る。
手拿越 ²⁰ 斧鎮乾坤	手に鉞斧を持って乾坤を鎮める。
身着紅衣斬邪鬼	紅色の衣を着て邪鬼を斬る。
都天 ²¹ 勅令顯神通	都天におり勅令し、神通を顯す。
雷霆 ²² 馬帥壇前立	雷霆馬元帥は祭壇の前に立てる。
出世小年十八春	生まれは、小年18日の春である。
身上掛着紅衣甲	紅色の鎧を着る。
手拿玉斧顯神通	手に玉斧を持ち、神通を顯す。
雷霆關帥隨左右	雷霆關元帥は左右に従う。
身着金甲上天宮	金の鎧を着て天宮へ上がる。
玉帝勅封為上將	玉帝に上將として封じられる。
手拿鐵鎖把壇中	手に鉄の鎖を持って祭壇を守る。

この部分は、鄧元帥、馬元帥、關元帥について記されている。文中の「把壇鄧師朝上坐」「手拿越斧鎮乾坤」「身着紅衣斬邪鬼」の字句から、鄧元帥は鉞斧を持ち、紅色の衣を着ることが分かる。また、乾坤を鎮めることできる勇猛な神であり、祭壇を守備し邪鬼を滅ぼす性格を持つ神であると読み取れる。儀礼神画から見た鄧元帥の持物と衣の色は、この記述の内容と一致している。

それから、馬元帥の記述を説明する。文中の「雷霆馬帥壇前立」「出世小年十八春」「身上掛着紅衣甲」「手拿玉斧顯神通」により、馬元帥は紅色の鎧を着、鉞斧を持ち、小年の18日の春に生まれたと読み取れる。中国の北部で小年とは主に旧暦の12月23日を指す。この記述中の小年に関して意味は不明である。神画に描かれる馬元帥は通常黄色の衣を着、鉞を持つと描かれるが、この記述から見た馬元帥の衣の色及び持物と完全に一致しない。

その次に、關元帥に関する記述である。文中の「雷霆關帥隨左右」の字句から、關元帥は鄧元帥あるいは馬元帥に従う神だと推断する。「身着金甲上天宮」「身着金甲上天宮」の字句から、關元帥は金色の鎧を着、鉄の鎖を持つという特徴が分かる。「玉帝勅封為上將」から、關元帥は玉帝（玉皇大帝）に任命された将官であることが読み取れる。

この三神の次に海旛神が記されている。この海旛神は大海旛であり、海旛張趙二郎ではない。

海藩出在丙午歲	海藩は丙午年に生まれる。
八月十五正午中	8月15日の真昼に生まれる。
身着紅衣掛金甲	紅色の衣を着て金の鎧を着る。

第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

脚踏火磚任任紅	脚は赤い火磚を踏む。
手拿犁頭度三度	手に犁先を持って三度を受け、
法教流傳四海通	法教が広く伝われ、四海まで知られる。
口咬犁頭紅東東 ²³	口に真っ赤な犁先を噛む。
衆官擁護在壇中	祭壇におり、官たちに擁護される。
無法之人真怕死	法ができない人は本当に死ぬことを恐れる。
有法之人心里容	法ができる人は心が広い。

海旛を描写している記述の「海藩出在丙午歳」「八月十五正午中」「身着紅衣掛金甲」から、海旛は丙午年8月15日昼に生まれ、紅地金色の鎧を着ていることが読み取れる。

注目したいのは、「脚踏火磚任任紅」「手拿犁頭度三度」「法教流傳四海通」「口咬犁頭紅東東」などの字句である。ここから見た、脚で火磚を踏み、手で犁先を持ち、口で真っ赤な犁先を噛むことは、全て祭司になるために受ける試練であり、「三度」という言葉は3回の試練を受けることを示していると考えられる。特に、手で犁先を持つということは、現在湖南省永州市藍山県の過山系ヤオ族(ミエン)が伝承している度戒儀礼の中の「捧火磚(捧火石)」という儀礼に見られる。実際の「捧火磚(捧火石)」儀礼において、受礼者たちは熱く熱した犁先をと石を取って手の上で転がし捧げる試練を受ける。この記述に記されることは、正に過山系ヤオ族(ミエン)の伝承している度戒儀礼中の試練を受ける内容の一部を示しているといえる。度戒儀礼の中で受けられる試練として、その他には、刀の山を越え、棘の床を渡ることも見られる。しかし、大海旛神画からよく見られるのは、刀の梯子を登る場面のみであり、赤い三角形の犁先を噛み、手で犁先を持ち、火磚を踏むなどのことが描かれるのはめったにない。

海旛に関する記述から、海旛は脚で火磚を踏み、手で犁先を持ち、口で真っ赤な犁先を噛む能力を持ち、法術が優れている神であると読み取れる。

その次に、太尉の記述となる。

太尉出在戊寅歳	太尉は戊寅年に生まれる。
十二月十五是寅時	12月15日寅時に生まれる。
身着紅衣騎白馬	紅衣を着て白馬に乗る。
度法醮壇為祖師	祖師として法を伝度する祭壇にいる。

文中の「太尉出在戊寅歳」「十二月十五是寅時」「身着紅衣騎白馬」の字句から、太尉は戊寅年12月15日寅の刻(3-5時)に生まれ、紅色の衣を着、白馬に乗ることが分かる。ここから見た衣の色と白馬に乗る特徴は、太尉神画に描かれる内容と一致している。また「度法醮壇為祖師」から、太尉は祭壇において法を伝授する祖師であると読み取れる。

その次に、十殿のことが記述されている。

第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

十殿冥王街 ²⁴ 前坐	十殿冥王は官庁の前に座る。
攔街赦罪己多強	官庁に止めて罪を赦する。
生時也過死也過	生まれる時も死ぬ時も通過する。
陰落手下定陰陽	あの世に落ちて陰陽を定める。

文中の「攔街赦罪己多強」「陰落手下定陰陽」という字句から、十殿は罪を赦免し、陰陽を定める性格が強く現れている。また「生時也過死也過」から、生まれる時も死ぬ時も必ず十殿冥王の前に通るという生死に対する考え方が見られる。

衆聖出在混沌歳	諸々の神は混沌の年に生まれ、
化身世上好神仙	世の中の良い神々になる。

ここの「衆聖出在混沌歳」とは、これまで記述された元始天尊、靈寶天尊、道德天尊、玉皇、聖主、天府、地府、陽間、水府、張天師、李天師、鄧元帥、馬元帥、關元帥、大海旛、十殿は混沌から生まれたことが分かる。

その次に、老君（太上老君）について記述されている。

老君出在青雲内	老君は青色の雲の内に生まれる。
天下匠人畫得成	世の中の匠は（老君の）容貌を描くことができる。
三清殿上巍巍坐	三清殿に高くそびえるように座り、
正是匠人畫得灵	正に手先が器用である匠の描いた通りである。
匠人畫出龍衣像	匠は龍衣を着る姿を描く。
衆官降下聖真容	諸々の神は降臨して本当の容貌を現す。
洪武年間降世出	洪武年間に生まれ、
正月十五是寅時	1月15日寅時であった。
一身便帶毫光鏡	鏡を持ち全身に毫光を放つ。
為車天上照凡間	車に乗って天におり、世の中を照らす。

文中の「老君出在青雲内」「洪武年間降世出」「正月十五是寅時」「一身便帶毫光鏡」という字句から、太上老君は洪武年1月15日寅の刻（3-5時）青色の雲から生まれ、鏡を持っているとある。「天下匠人畫得成」「正是匠人畫得灵」「匠人畫出龍衣像」などの字句から、老君は絵師によって龍の模様の衣を着る姿として描かれると読み取れる。太上老君は、別名道德天尊ともいう。道教の始祖とみなされる老子が神格化されたもので、道教の三清の一であるとされる。文中の「三清殿上巍巍坐」とは、太上老君は三清殿に座ることを示し、正に三清の一であることを示していると考えられる。

第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

家主有心来敬奉	家主は謹んで信仰すると考える。
保安家主進金銀	家主の安全を保つために金と銀を差し出す。
敬奉灵神神護佑	霊神を謹んで信仰し、神々の加護を頂く。
進金進寶進人丁	金や宝は（家に）入り、人口が増える。

ここの「敬奉灵神神護佑」「進金進寶進人丁」などの字句から、以上で記述された神々を謹んで奉ずるならば、その加護を頂くことができ、財産や人口などが増えるようになるという祈願が見られる。

その次に、「混沌歌」の最後の部分になる。

教堂 ²⁵ 裏内千般聖	祭場の内に様々な神がおり、
教堂度賀衆灵神	祭場で諸々の神（の降臨）を祝う。
千年難逢灵神到	霊神が降臨するのは、めったに会えないのである。
萬年難逢灵神筵	霊神が集まることもめったに会えないのである。
龍華會上好耍笑	龍華会に集まっておどけ話をする。
開言一句賀灵神	話を始めると、霊神に一言祝をいう。
聞説今朝有相請	現在招請を聞くなら、
衆官座位一斉臨	諸々の神は同時に来臨せよ

この部分の「教堂裏内千般聖」「千年難逢灵神到」「聞説今朝有相請」「衆官座位一斉臨」とは、諸々の神と一緒に祭壇に降臨したということである。

以上では、「混沌歌」に記される内容を分析してきた。内容から神画に描かれる元始天尊、靈寶天尊、道德天尊、玉皇、聖主、天府、地府、陽間、水府、張天師、李天師、鄧元帥、馬元帥、關元帥、大海旛などの神々の生年月日、誕生時刻、冠物、持物、衣服の色、乗物などの情報を読み取ることができた。記述から見たこれらの神々の冠物、衣服の色、持物、乗物などに関しては、神画に描かれる部分と多少の差異が見られるが、殆ど一致していることが判明した。さらに、神々の生年月日と誕生時刻も分かり、神画に描かれる神々に関する情報を一層知るようになってきた。

また、「混沌歌」の内容により、ヤオ族が考えている神の世界は、混沌から、高皇や唐皇などの創世神の誕生・天地の開闢・衣や火や日月などの創造・神々の誕生というプロセスで形成されていることが見える。記述に記される、混沌の時に生まれた、元始天尊、靈寶天尊、道德天尊、玉皇、聖主、天府、地府、陽間、水府、張天師、李天師、鄧元帥、馬元帥、關元帥、大海旛、十殿は、ヤオ族のパンテオンであると言えよう。これらの神々は全て儀礼神画に描かれている。よって、儀礼神画は、ヤオ族のパンテオンを絵画的に表現したものであると言える。

第2項 三清神（元始天尊・靈寶天尊・道德天尊）に関する記述

◆ 請聖書の冒頭部分に配置された三清神に関する記述²⁶

請聖書のはじめに、天地が分かれたことによって生成したとされる字句が記されている。その内容を次のように記述している。

太極分高厚	太極は分れて高く（天）厚く（地）、
謹請上属天	謹んで上天に属さんことを請う。
人民修正道	人民は正しい道を修め、
壇内作真仙	壇の内に真仙となる。
行満三千界	行は三千界に満ち、
時登四萬年	時に四万年に登る。
當台開宝殿	台に宝殿を開き、
金口永流伝	金口は永遠に流伝する。
人生須未老	人生は須らく未だ老いず、
壇内焼炉香	壇内に一炉の香を焼く。

文中の「太極分高厚」とは、陰陽が分れて天が高くなって地が厚くなるということである。「人民修正道（人民は正しい道を修め）」、「壇内作真仙（壇の内に真仙となる）」、「行満三千界（行は三千界に満ち）」、「時登四萬年（時に四万年に登る）」、「金口永流伝（金口は永遠に流伝する）」などの字句は、人々は正しい道を修めるようにと忠告して戒めている。正しい道を修めるならば、真の神になり、修業は大成し、世に盛名を永久に残すとされる。このようなプロローグ的記述は、ほとんどの請聖書先頭部分に置かれている。この記述の次に、三清の元始天尊、靈寶天尊、道德天尊をはじめ、様々な神が登場してくる。

まず、元始天尊の記述を確認したい。

皈依天、正法教、神馬通	天に帰依し、法教を正す。神馬が通じ、
妙想慈悲十劫内	妙なる想い慈悲は十劫の内に（行き渡る）。
天星正法得威勇	天星の正法は威勇なるのを得て、
回照下壇宮	下壇宮を回照す。
金宝相、青雲化、化巍々	金宝の容貌で、青雲が化し、高大な様に化し、
照見四邊感大道	四辺を照見して大道を感ぜしめ、
閻浮世界度人民	閻浮世界に人民を度（すく）う。
天下滅邪精	天下に邪精を滅す。
聞照請、元始天尊降來臨	招請を聞けば、元始天尊は來臨する。

第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

火急甲速来臨 火急的に速やかに来臨する。

この記述は、元始天尊についての説明である。文中の「金宝相（金宝の容貌）」は、神を褒める言葉である。「天星正法得威勇（天星の正法は威勇なるを得る）」、「閻浮世界度人民（閻浮世界に人民をすくう）」、「天下滅邪精（天下に邪精を滅す）」などの字句は、邪鬼・邪精を滅ぼす者という性格が強く現れている。次に靈寶天尊に関する記述が続く。

皈依法、青雲化、化巍巍	法に帰依し、青雲が化し、高大な様に化す。
變化三千感大道	三千に変化して大道を感じ、
度人無數変河沙	人を済度すること無数にして、河の沙を变ずるようなもの、
宝上坐蓮花	宝の上に蓮花に座る。
樓台内高萬丈	楼台の内に（あり）高さは萬丈、
金来装身着仙衣	金によって身を装い、
數白領坐天宮内	仙衣を着すこと数百領、天宮内に坐り、
下照萬方管人民	下は萬方を照らして人民を管理する。
天下滅邪精	天下に邪精を滅し、
聞召請、靈寶天尊降齊臨	招請を聞けば、靈寶天尊は降臨する。
火急甲速来臨	火急的に速やかに来臨する。

この記述は、靈寶天尊が「蓮花（蓮華）」に座り、「仙衣（仙人の衣）」を着、万丈ある高い「天宮（天の宮殿）」にいる様子を描写している。また、「下照萬方管人民（下は萬方を照らして人民を管理する）」とあるが、これは靈寶天尊の位が高いことを象徴し、さらに民を統治する統率者として存在することである。靈寶天尊に関する記述でも、元始天尊と同様の形容が使われており、「天下滅邪精（天下に邪精を滅し）」という邪精を滅ぼすという性格は共通している。

次に道德天尊に関する呪文が続く。

皈依師、感道德、天也尊	師に帰依し、道德に感ず。天もまた尊し。
老母懷胎八十春	老婆懐胎すること八十春、
九龍運水洗陽間	九龍は水を運び陽間を洗う。
頭髮白如銀	髪の毛は白く銀の如し。
道高龍俯付	道は高く龍が付きて俯く、
真有道天仙	真の有道の天仙である。
知善知凶真御領	善を知り凶を知って真の統領、
玉皇案上共同心	玉皇案上に心を共に同じくし、
斬鬼滅邪精	鬼を斬り邪精を滅す。

第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

聞召請、道德天尊降来臨 招請を聞けば、道德天尊は来臨する。

道德天尊は老子が神格化された神で、文中の「老母懐胎八十春」というのは、老子が80歳の母親から誕生したという伝承を踏まえていると松本浩二はいう[松本 2011:25]。「頭髮白如銀(髪の毛は白く銀の如し)」という句は、道德天尊の容貌を描写している。儀礼神画に描かれている道德天尊も正にこの記述のように、髪・眉・髭が真っ白な老人像である。このことから、文献記述と神画に描かれている道德天尊の特徴が一致していることは明白である。また文中の「知善知凶真御領(善を知り凶を知って真の統領)」、「天下滅邪精(天下に邪精を滅し)」などの句から、道德天尊の統率者と邪精を滅ぼす者という性格が現れている。さらに異なる請聖書に収められる三清に関する歌を取り上げる。

「接大三清歌」²⁷

香煙裡内是壇前	香煙の中、祭壇の前である。
大道 ²⁸ 元来降醮筵	大道は醮筵に來臨する。
大道原来龍虎伏	大道は本来龍と虎が伏す。
南曹北斗在神仙	南曹北斗の仙人もいる。
一個在前個在後	一人は前で一人は後ろに、
踏上州門入旧天	州門に踏み上がって九天に入る。
三清出在青雲殿	三清は青雲殿の出身である。
原在紫雲化出身	本来紫雲から身を化す、
紫雲画身生白■	紫雲から身を化して白い■を生す。
世今壇内得安身	現在祭壇の内に身を寄せている。
頭帶金冠脚踏地	頭に金冠を被って脚は地を踏む。
手拿大扇立胸前	手に大きな扇子を縦に持って胸の前に置く。
聞說今朝有狀請	現在招請を聞き、
元始天尊齊下壇	元始天尊たちは一緒に祭壇に來臨する。
元始天尊為第一	元始天尊第一と為す。
靈寶天尊第二名	靈寶天尊は第二である。
道德天尊第三教	道德天尊は第三教である。
老君殿上好排兵	老君は殿上で好く兵隊を排列できる。
日裡又發千兵去	昼頃に千の兵隊を出兵させ、
夜裡又發萬兵行	夜に又萬の兵隊を出兵させる。
同來又叫高宮聖	一緒に来て又高宮聖を呼ぶ。
斬鬼除邪界玉皇	斬鬼除邪界の玉皇は、
頭帶金冠脚踏地	頭に金冠を被って脚は地を踏む。
手拿牙簡立胸前	手に牙簡(圭)を縦に持って胸の前に置く。

第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

聞説今朝有状請 現在招請を聞けば、
太上老君齊下壇 太上老君も一緒に祭壇に來臨せよ。

この記述は、三清が青色の瑞雲から現れ、順番に天から降りてくる様子を描写している。「頭帶金冠（頭に金冠を被る）」、「手拿大扇立胸前（手に大きな扇子を縦に持って胸の前に置く）」という記述は、三清神画に描かれている道德天尊の姿と一致している。文中の「元始天尊為第一」「靈寶天尊第二名」「道德天尊第三教」の字句は、この三柱の神の位の高低を示していると考えられる。三清神の他に、太上老君と玉皇も見られる。「老君殿上好排兵（老君は殿上で好く兵隊を排列できる）」、「日裡又發千兵去（昼頃に千の兵隊を出兵させる）」、「夜裡又發萬兵行（夜に又萬の兵隊を出兵させる）」などは、太上老君は兵隊を使役する者という性格を強く現しており、「斬鬼除邪界玉皇（斬鬼除邪界の玉皇）」は、玉皇の邪鬼を滅す者という性格を現している。

第3項 玉皇に関する記述

請聖書の中にある玉皇に関する記述は、「玉皇歌」のような独立している歌があるが、「請大堂兵歌」の一部として記述される場合もある。「請大堂兵歌」には、様々な神を描写しており、本項では、玉皇を描写する部分のみ抽出して紹介する。まず、「玉皇歌」を見て行きたい。

「玉皇歌」²⁹

玉皇星主大王天	玉皇星主は大王天である。
大道原来降醮筵	玉皇は本来醮筵に來臨する。
十七十八郎歸位	17/18歳で神の位に歸す。
二十道德我歸天	20歳に道德天尊が我を天に歸す。
高上玉皇郎大帝	高上玉皇郎大帝は、
含毛頭戴紫金冠	頭に紫金冠を被る。
玉皇頭戴平天帽	玉皇は頭に平天帽を被る。
兩辺帽戴 ³⁰ 一般齊	帽子の兩側の紐の長さは同じである。
大道原来龍虎伏	本来大道になれば龍と虎が伏す。
龍蛇虎伏蓋郎兵	龍・蛇・虎が伏して郎の兵隊を圧倒する。
日裡又發千兵去	昼に千の兵隊を出兵させ、
夜裡又發萬兵行	夜に又萬の兵隊を出兵させる。
抽頭望見高宮聖	振り返ると高宮聖を眺められる。
邪師送出鬼邪神	邪師は鬼や邪神を送り出す。
頭戴平天脚踏地	頭に平天帽を被り、脚は地を踏む。
手拿牙簡立胸前	手に牙簡（圭）を縦に持って胸の前に置く。

第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

聞説今朝有状請	現在招聘を聞けば、
推車放攬降香壇	車を推して繩を置き、祭壇に來臨する。

「玉皇歌」の、「玉皇星主大王天（玉皇星主は大王天である）」「十七十八郎歸位（17/18歳で神の位に歸す）」「二十道德我歸天（20歳に道德天尊が我を天に歸す）」などの字句は、玉皇星主は天の王であり、17/18歳に神になり、20歳になったら、天に歸されると解釈する。玉皇と星主はもともと異なる神である。しかし、筆者は現地では神画の調査を行う際に、何点かの玉皇神画の裏に「玉皇星主」の文字が書かれていることを確認している。また一部の祭司は玉皇神画を「玉皇星主」と呼ぶ場合もある。よって「玉皇歌」の冒頭に出てきた「玉皇星主」とは、二柱の神のことではなく、玉皇のみ指していると考えられる。

また「玉皇頭戴平天帽（玉皇は頭に平天帽を被る）」「両辺帽帯一般齊（帽子の両側の紐の長さは同じである）」「手手拿牙簡立胸前（手に圭を縦に持って胸の前に置く）」という字句は、玉皇の姿を描写している。また、「日裡又發千兵去（昼頃に千の兵隊を出兵させる）」「夜裡又發萬兵行（夜に又萬の兵隊を出兵させる）」は、玉皇の兵隊を使役する性格を現していると考えられる。

さらに「請大堂兵歌」に記される玉皇の記述を取り上げる。

「請大堂兵歌」に記された玉皇に関する記述 ³¹	
玉皇星主大王天	玉皇星主は大王天である。
大道原来降醮筵	玉皇は本来醮筵に降りて來臨する。
十七十八郎歸位	17/18歳に神位に歸す。
二十道德我歸天	20歳に道を得て、我は天に歸す。
頭戴平天脚踏地	頭に平天帽を被り、脚は地を踏み、
手拿牙簡案脳前	手に圭を持っている。
聞説今朝有相請	現在招聘を聞けば、
推車放攬降香壇	車を押して繩を置き、祭壇に來臨する。

「請大堂兵歌」は、「玉皇歌」の前後の二行を切り取ってできたものであるため、記された内容は同じであり、ここでは詳述しない。

また、玉皇に関する記述は「請大堂兵歌」に記されていることから、過山系ヤオ族(ミエン)の神々の中で、玉皇は「大堂兵」として位置づけられていると考えられる。「大堂兵」は、位が高いであろう。よって、玉皇は神であるばかりでなく、位の高い兵とする性格も見える。

第4項 聖主に関する記述

本項では、『請聖書』に収められる、聖主に関する記述を紹介する。これは玉皇の記述と同様で、独立している歌があり、また「請大堂兵歌」の一部として記されている場合もある。いず

れも同様な内容であるため、一緒に見て行きたい。

「聖主歌」³²

聖主出在青雲内	聖主は青雲の内から現れる。
北斗叫郎做天尊	北斗神はこれを天尊と呼ぶ。
你為上清為功德	聖主は功德のため上清と為す。
聖主修来十洞田	聖主は十洞田を修来する。
頭戴平天脚踏地	頭に平天帽を被り、脚は地を踏む。
手拿牙簡立胸前	手に圭を縦に持って胸の前に置く。
聞説今朝有状請	現在招請を聞けば、
聖主推車降香壇	聖主は車を推して祭壇に來臨する。

さらに「請大堂兵歌」に記される聖主の記述を取り上げる。

「請大堂兵歌」に記された聖主に関する記述³³

星主出世青雲内	星主は青雲の内から生まれた。
北斗叫郎做天尊	北斗神はこれを天尊と呼ぶ。
你為天尊為功德	星主は功德のため天尊と為す。
星主修来十重天	星主は十重天を修来する。
頭載平天金魁帽	頭に平天金魁帽を被り、
手拿牙簡案脳前	手に圭を持っている。
聞説今朝有相請	現在招請を聞けば、
推車放攬降香壇	車を推し繩を置き、祭壇に來臨する。

聖主はまた星主とも呼ばれる。中国語の中で、「聖 (shèng)」と「星 (xīng)」の発音は似ており、筆者は調査の際に、一部の過山系ヤオ族(ミエン)の祭司が「聖主」と「星主」を混同して使うことを確認している。よってここでの「星主」と「聖主」は同じ神であると考えられる。「星主」という呼称は、星の神を意味するのであろう。また、記述から、聖主(星主)は天尊であり、位が高い神であることが分かる。

以上の二つの記述には、聖主(星主)は青色の瑞雲から現れ、頭に冕を被り、手に圭を持ち、車に乗って祭壇に降臨する様子を描写している。この描写は神画に描かれている聖主の服装などと一致する。

前項で述べた玉皇と同じように、過山系ヤオ族(ミエン)の神々の中では、聖主も「大堂兵」として位置づけられていると考える。

第5項 天師（張天師・李天師）に関する記述

天師に関する記述には、張天師と李天師の他に、様々な神が見られる。以下に、「張天師」と「請大堂兵歌」に記されている天師の部分について述べる。

「張天師」³⁴

上元学法張天師	上元に法を学ぶ張天師、
中元学法李天師	中元に法を学ぶ李天師。
三个天師去学法	三人の天師は法を学びに行き、
天師学法好宮星	天師は法を学ぶ好い宮星である。
當初学法張趙二	当初、法を学ぶ張趙二は、
世今学法尽帰依	現在も法を学んで既に帰依している。
只有凡人不信法	凡人だけは法を信じない。
法在陽州弟子壇	法は陽州の弟子壇にある。
張趙二郎去請鼓	張趙二郎は太鼓を請いに行く。
塞断八郎去請鑼	雲山十郎は刀と劍を請いに行く。
雲山十郎請刀劍	塞断八郎は鑼を請いに行く。
請得刀劍請法師	刀と劍を請うことができ法師を請う。
楊山十九去請角	楊山十九郎は角笛を請いに行く。
閻山七郎去請兵	閻山七郎は兵隊を請いに行く。
才禄二庫身着緑	財禄二庫の神様は緑色の衣を着る。
六印判官身着紅	六印判官は紅色の衣を着る。
叫作天蓬都元帥	名前は天蓬都元帥と呼ばれる。
押過天遊副將軍	護送して天遊副將軍は過ぎる。
頭戴金冠脚踏地	頭に金冠を被って脚は地を踏む。
手拿牙箭立胸前	手に圭を縦に持って胸の前に置く。
上元学法張天子	上元に法を学ぶ張天子、
随娘去嫁李家兒	母親のあとにつき従って李家の息子に嫁いで行く。
聞説今朝有状請	現在招請を聞けば、
張天任々降香壇	張天師は（任々の意味は不明）祭壇に來臨する。

「張天師」という題名を付けているが、内容からは李天師及びその他の神々の神名も見られる。はじめに記されているのは、「上元学法張天師（上元に法を学ぶ張天師）」「中元学法李天師（中元に法を学ぶ李天師）」という字句であり、張天師は上元に法を学び、李天師は中元に法を学ぶ様子が描写されている。天師に法を学ばせるために、張趙二郎などの神々が様々な法具を請いに行く様子も描写している。張趙二郎は太鼓を請いに行き（張趙二郎去請鼓）、塞断八郎は鑼を請

第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

いに行く（塞断八郎去請鑼）。雲山十郎は刀と剣を請いに行き（雲山十郎請刀劍）、刀と剣を請うことができ後に法師を請う（請得刀劍請法師）。楊山十九郎は角増えを請いに行き（楊山十九去請角）、閻山七郎は兵を請いに行く（閻山七郎去請兵）。またこれらの神々の後に、緑色の衣を着る財禄二庫、紅色の衣を着る六印判官、天蓬都元帥、遊副將軍という名前の神々も見られる。記述の最後に、天師は頭に金冠を被って脚は地を踏み（頭戴金冠脚踏地）、手に圭を縦に持って胸の前に置く（手拿牙簡立胸前）という姿を描写している。これは神画に描かれている天師の様子と一致している。

さらに「請大堂兵歌」に記される天師の記述を取り上げる。

「請大堂兵歌」に記された天師に関する記述³⁵

上元学法張趙二	上元に法を学ぶ張趙二、
中元学法李天師	中元に法を学ぶ李天師。
三個天師去学法	三人の天師は法を学びに行き、
天師学法好容身	天師は法を学び、身をよく寄せられる ³⁶ 。
上界之人無世界	上界の人は世界がない。
下界中元伏鬼神	下界の中元は鬼神を伏す。
聞説今朝有相請	現在招請を聞けば、
天師臨々降香壇	天師は（臨臨の意味は不明）祭壇に來臨する。
龍虎面前張家子	龍虎の目の前にいる張家の息子、
龍虎壇内正学師	龍虎壇内で師から法を学んでいるところである。
小師法水尋鬼劍	小師は法水で鬼劍を尋ねる、
身着紫微龍鳳衣	身に紫微龍鳳模様の衣を着る。
四天大王玄請角	四天大王角を請いに行く。
七路八郎去請羅	七路八郎は羅を請いに行く。
閻山十二請刀劍	閻山李十二は刀劍を請いに行く。
請得刀劍請法壇	刀劍を請うことができ、法壇を請う。
張趙二郎去請角	張趙二郎は角を請いに行く。
閻山九郎去請兵	閻山九郎は兵隊を請いに行く。
財源判官身着緑	財源判官は身に緑の衣を着る。
祿縁判官身着青	祿縁判官は身に青の衣を着る。
叫着天蓬都元帥	天蓬都元帥を呼び、
合着天■副將軍	■副將軍に合う。
若有邪師來闕法	もしも邪師が法と戦いに來たら、
十分有法闕閑心	十分に法を持ち、閑心と戦う。
聞説今朝有相請	現在招請を聞けば、
天師焰々下壇前	天師は祭壇の前に來臨する。

「請大堂兵歌」と前頁で紹介した「張天師」と比較してみると、大まかな内容は同じである。二つの記述のはじめの部分には、上元と中元それぞれに張天師と李天師を相互対応させていることが見られる。また、二つの記述とも「三個天師去学法（三人の天師は法を学びに行く）」に言及したが、実際には二人の天師しか記述されていない。「請大堂兵歌」には、「若有邪師来闘法（もしも邪師が法と戦いに来たら）」「十分有法闘閑心（十分余裕を持って法と戦う）」の字句から、天師は法術のレベルが高い神として表現されていることが分かるが、「張天師」にはこのような字句が記されていない。また、前項で述べた玉皇、聖主と同じように、過山系ヤオ族(ミエン)の神々の中では、天師も「大堂兵」として位置づけられていると考えられる。

第6項 四府（天府・地府・水府・陽間）に関する記述

四府は、天府、地府、水府、陽間の四神のことを指す。以下で紹介する「接四府」と「天府出世」・「地府出世」・「水府出世」・「陽間出世」には、この四神のことを述べている。まず、「接四府」を見て行きたい。

「接四府」³⁷

天府出世桂林縣	天府は桂林縣で生まれ、
眼睛眉々不知天	目が凛々しく天を知らない。
道處買賣在道葉	道葉での商売は。
一枝一秀一枝泉	(意味不明)
聞説今朝有相請	現在招請を聞けば、
打開天府降香壇	天府を開いて祭壇に來臨する。
地府出世廣州府	地府は廣州府で生まれ、
踏上任々求大官	立身出世し大官を求める。
百姓耕田門下請	百姓は田を耕して門下で請う。
劉車放馬問枝泉	車を残して馬を放置して根源を問う。
聞説今朝有相請	現在招請を聞けば、
打開地府降香壇	地府を開いて祭壇に來臨する。
水府出世沙州府	水府は沙州府で生まれ、
踏上任々求大官	立身出世し大官を求める。
上水有條扒海棍	川の上流に一本の扒海棍があり、
下海廣州大海茫	下流廣州の海は大きくて広い。

第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

大海荒荒不見面 小海荒荒不見身 撐舡過海立官帝 無舡過海問根源 聞説今朝有相請 打開水浪出扶龍	大きな海は広くて見えず、 小さい海も広くて見えない。 船に乗って海を渡って官帝を築き上げる。 船がなくても海を渡り根源を問う。 現在招請を聞けば、 波を開いて龍に乗って出かける。
陽間出世吳州府 踏上任々求大官 踏上州門州也過 香壇鑼鼓鬧喧々 聞説今朝有相請 打開陽界降香壇	陽間は吳州府で生まれ、 立身出世し大官を求める。 州門を踏み上がって州も過ぎ、 祭壇の鑼鼓を大きな音で鳴らしている。 現在招請を聞けば、 陽界を開いて祭壇に來臨する。

記述は、天府、地府、水府、陽間の四神の順に、各々の神の出身地などについて段落に分けて記されている。各段落のはじめに「天府出世桂林縣」「地府出世廣州府」「水府出世沙州府」「陽間出世吳州府」の字句が置かれ、天府は桂林県で生まれ、地府は広州府で生まれ、水府は沙州府で生まれ、陽間は吳州府で生まれたとする。

天府の段落において、出身地の後に、「眼睛眉々不知天（眼が凜々しく天を知らない）」の字句がある。これは、天府の目元の凜々しい様子を描写しているのであろう。またその後の「道處買賣在道葉（道葉での売買は…）」という字句は、意味ははっきりと分からないが、天府の職業に関する性格が見える。水府の段落においては、「下海廣州大海忙（下流広州の海は大きくて広い）」「大海荒荒不見面（大きな海は広くて見えない）」「小海荒荒不見身（小さい海も広くて見えない）」「撐舡過海立官帝（船に乗って海を渡って官邸を築き上げる）」「無舡過海問根源（海を渡る船がなくて根源を問う）」「打開水浪出扶龍（波を開いて龍に乗って出かける）」などの字句から、水府は海との関わりがある水神だと考えられる。地府と陽間については、特に目立つ特徴はなかった。

さらに「天府出世」・「地府出世」・「水府出世」・「陽間出世」の記述を取り上げる。

「天府出世」・「地府出世」・「水府出世」・「陽間出世」 ³⁸	
「天府出世」	
天府出世貴林縣	天府は貴林縣で生まれ、
一枝二看不知天	（意味不明）天を知らない。
道州買賣便第一	道州での商売は第一位である。
弍曹二受一枝尊	（意味不明）
聞説今朝友狀請	現在招請を聞けば、

第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

發開天府降香壇

天府を開いて祭壇に来臨する。

「地府出世」

地府出世廣州府
傳得人民置得官
百姓耕田人下住
留車■馬問根源
聞説今朝友狀請
發開地府降香壇

地府は廣州府で生まれ、
百姓に伝えることができ、官を置くことができる。
百姓は田を耕して人の下に住む。
車を残して馬を■根源を問う。
現在招請を聞けば、
地府を開いて祭壇に来臨する。

「水府出世」

水府出世廣州府
傳得人民置得官
上村有个人樂洞
下在廣東大海門
大海忙々不見岸
小海忙々不見天
撐舡過海立官廳
撐舡過海問根源々
聞説今朝有狀請
發開水府降香壇

水府は廣州府で生まれ、
百姓に伝えることができ、官を置くことができる。
村の入り口に一つの八楽洞がある。
村はずれは廣東大海門にある。
大きい海は広くて岸が見えない。
小さい海は広くて天が見えない。
船に乗り、海を渡って官庁を立つ。
船に乗り、海を渡って根源を問う。
現在招請を聞けば、
水府を發開して祭壇に来臨する。

「陽間出世」

陽間出世為州府
踏上宜々求大官
上村也過西也過
香壇鑼鼓鬧喧々
香村鑼鼓鬧喧々
發開陽間降香壇
聞説今朝有狀請
陽間住々一齊臨

陽間は為州府で生まれ、
立身出世し大官を求める。
村の入り口も通り、西にも通る。
祭壇の鑼鼓を大きな音で鳴らしている。
祭壇の鑼鼓を大きな音で鳴らしているので、
陽間を開いて祭壇に来臨する。
現在招請を聞けば、
陽間たちは一緒に來臨する。

前頁の「接四府」と対応して見ると、二つの記述は特に大きな差はなかったが、細かいところは幾つかの違いが見られる。例えば、四府の出身地に関して、「天府出世」では、天府は「貴林県」で生まれたとするが、中国語で「貴 (gui)」と「桂 (gui)」の発音は同じであるため、同じ地名とも考えられる。「水府出世」では、水府は「広州府」で生まれたとするが、「接四府」では、

「沙州府」で生まれたと記される。また、「陽間出世」では、陽間は「為州府」で生まれたとするが、「接四府」では、「呉州府」で生まれたとなっている。

さらに、「接四府」に記されている天府と水府の部分と同様に、「天府出世」においては、天府は商業神としての性格が強く見られ、「水府出世」においては、水府を水神とすることは明確であろう。

第7項 三将軍に関する記述

『三教源流聖帝佛祖搜神大全』によれば、三将軍は、即ち道教神の三元真君である。唐将軍は名を唐文明といい、上元道化唐真君である。葛将軍の名は葛文慶といい、中元護正葛真君である。周将軍は名を周文剛といい、下元定志周真君であるという[王ほか 1989 : 99-100]。以下に、この三人の将軍に関する記述を述べる。

「唐葛周三将軍」 ³⁹	
上元唐将軍	上元の唐将軍は、
嶺上白藤唐屋児	嶺上にある白藤の唐家の息子である。
中元葛将軍	中元の葛将軍は、
嶺上白藤葛屋児	嶺上にある白藤の葛家の息子である。
下元周将軍	下元の周将軍は、
嶺上白藤周屋児	嶺上にある白藤の周家の息子である。
郎叫弑聲你不應	将軍を一回呼んでも答えず、
郎叫二聲你不知	二回呼んでも知らず、
郎叫三聲你正應	三回呼んだら答えた。
三界将軍齐下壇	(上元・中元・下元) 三元の将軍は一緒に祭壇に降りてくる。
聞説今朝有状請	現在招請を聞けば、
齐々整々降香壇	整然として祭壇に降臨する。

さらに「請下壇歌」に記された三将軍の部分を取り上げる。

「請下壇歌」に記された三将軍に関する記述 ⁴⁰	
啟請上元唐将君	上元の唐将軍を請うことを申し上げる。
岑上白藤唐屋児	嶺上にある白藤の唐家の息子である。
中元葛将軍	中元の葛将軍は、
岑上白藤葛屋児	嶺上にある白藤の葛家の息子である。
下元周将軍	下元の周将軍は、
岑上白藤周屋児	嶺上にある白藤の周家の息子である。

第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

郎叫一声你不應	將軍は一回呼んで返事をしない。
郎叫二声你不知	將軍は二回呼んでも知らず。
郎叫三声你正應	將軍を三回呼んで返事をした。
三個將軍齊下壇	三人の將軍は一緒に祭壇に降臨する。
聞説今朝有相請	現在招請を聞き、
齊々正々降香壇	整然として祭壇に降臨する。

以上に紹介した二つの記述から見た三將軍は、三元（上元・中元・下元）に当てはまる三人の兄弟のような位置づけがなされている。

三將軍に関する記述は「又請下壇歌」に記されていることから、過山系ヤオ族(ミエン)の神々の中で、三將軍は下壇兵将として位置づけられていると考える。

第8項 元帥神に関する記述

本項では、元帥神を描写する記述を通して、元帥神の性格を見て行きたい。まず、「元帥呪」「雷公呪」を紹介したい。この二つの内容は殆ど同じであり、次のように記述している。

「元帥呪」-1⁴¹

都天大雷公	都天にいる大雷公は、
霹靂鎮虚空	霹靂を起し、虚空を鎮める。
統兵三千萬	三千萬の兵を統率し、
■駕在雲宮	雲宮に駐在する。
若有不伏者	もし従わない者がいれば、
雷令定不容	雷令は絶対に許さない。
化為清淨此	教化してこれを浄める。
雷宮大天尊	雷宮の大天尊である。

次に、「雷公呪」を取り上げる。

「雷公呪」⁴²

郁都天大雷公	郁都天（意味は不明）にいる大雷公は、
霹靂鎮虚空	霹靂を起し、虚空を鎮める。
統兵三千萬	三千萬の兵を統率し、
嚴駕紫雲宮	厳しく紫雲宮に駐在する。
若有不報者	もし報いない者がいれば、
雷公定不容	雷公は絶対に許さない。

第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

押赴魁罡下 (報いない者を) 魁罡⁴³の下に拘禁して赴き、
化為浄々中 教化して(世の中は)清浄になる。

二つの記述中の「郁都天大雷公(郁都天にいる大雷公)」「霹靂鎮虚空(霹靂を起こり、虚空を鎮める)」「雷令定不容(雷令は絶対に許さない)」「雷宮大天尊(雷宮の大天尊である)」などの字句は、元帥神は霹靂を起こすことができ、雷宮(雷神の宮殿)に住し、雷令⁴⁴を使える雷神の中での高位者であることを現している。「統兵三千萬(三千萬の兵を統率する)」とは、元帥は兵隊の統率者とする性格を現している。さらに、「若有不伏者(もし従わない者がいれば)」「雷令定不容(雷令は絶対に許さない)」などの字句は、賞罰を明らかにし、元帥としての威厳を強く現している。

さらに、異なる「元帥呪」の記述を取り上げる。

「元帥呪」-2⁴⁵

勅封康元帥	康元帥を勅封し、
護國救良民	国を護り、善良な人民を救う。
上朝玄帝将	天上界に出れば、玄帝の將軍を務める。
下界斬邪精	人間の世界に下りれば、邪精を斬る。
風雷前后奉	風と雷は前後にかしずく。
掃蕩鎮乾坤	一掃して天下を平定する。
手拿邪鉄劍	手に邪鉄劍を持ち、
脚踏黒青雲	脚は黒青色の雲を踏む。
申天動倒地	天から地まで、
収魔斬邪精	魔を収め、邪精を斬る。
奏入金闕殿	金闕殿に上奏し、
黄涼化微塵	(意味不明) 微塵になる。
即速地祇司	速やかに(意味不明)、
康帥降來臨	康元帥は降臨する。

この記述は、「康元帥」という元帥神を描写している。「上朝玄帝将(天上界に出れば、玄帝の將軍を務める)」の字句は、玄帝との関係が強調されている。「下界斬邪精(人間の世界に下りれば、邪精を斬る)」「収魔斬邪精(魔を収め、邪精を斬る)」の字句は、元帥の魔や邪精を滅ぼす性格を強く現している。「風雷前后奉(風と雷は前後にかしずく)」「掃蕩鎮乾坤(一掃して天下を平定する)」の字句は、元帥の威風を現している。また、「手拿邪鉄劍(手に邪鉄劍を持つ)」「脚踏黒青雲(脚は黒青色の雲を踏む)」というのは、元帥の姿を描写している。「風雷前后奉」の字句を除き、記述に雷と関わりがある部分は少なかったため、雷神ほどの強力な性格は見られない。

さらに、「雷霆呪」という題名の記述を取り上げる。

「雷霆呪」⁴⁶

雷霆元帥鄧元君	雷霆元帥の鄧元君は、
好做神通猛力神	神通力がある神である。
手拿鉞斧随天轉	手に鉞斧を持って天に従ってぐるぐる回る。
斬天斬地滅邪精	天と地を斬り、邪精を滅ぼす。

この記述は、雷霆元帥の鄧元帥を描写しており、「好做神通猛力神」とは、鄧元帥は神通力があるということを示している。「手拿鉞斧随天轉」は、鄧元帥は、手に「鉞斧」を持っている様子を描き、「斬天斬地滅邪精」は、邪精を滅ぼす者という性格を示している。

以上紹介した元帥神に関する記述は、元帥神は雷神としての性格、兵の統率者としての性格、また邪精を滅ぼす者としての性格が強く現されている。

第9項 海幡張趙二郎に関する記述

本項で紹介する海幡神に関する記述は、大海幡ではなく、黒龍に乗る海幡張趙二郎である。記述は、以下の如くである。

「海幡張召二」⁴⁷

啓請海幡張召二	海幡張召二郎を請うのを申し上げる。
二郎学法在天門	二郎は天門で法を学ぶ。
你在天門借你脚	天門で二郎の脚を借りる。
借你来龍問你長	二郎の来龍を借りて…（意味不明）
你在来龍三百里	二郎は来龍の三百里にいる。
我是度錢童子郎	私は錢を計量する童子郎である。
挑水煮飯同共吃	水を汲んでご飯を炊いて一緒に食べ、
今夜小師不曾停	今夜小師は留まることはない。
我有散金三百兩	私は配ることの出来る金が三百両ある。
挑去殿上進老君	宮殿の上まで担いで行き、老君に差し上げる。
老君一聲来度法	老君は一声で法を度しにくる。
手把人容掛我身	手で人の容貌を我が身に掛ける。
老君有条八倉劍	老君は一本の八倉劍を持っている。
脚踏水車路地穿	脚は水車を踏み大地を穿つ。
老君殿上巍々坐	老君は宮殿の上で高々と坐っている。
担得烏雲来到辺	烏雲を担いで近辺に来る。

第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

郎行一步祖師抉	郎は一步で祖師が選び出す。
又行二歩祖師伝	又二歩で祖師が伝授する。
三十六人斉下拜	三十六人は同時に礼をして、
思着當初学法時	当初法を学ぶ時の様子を思い出す。
六郎胆大開口問	六郎は勇気があり、口を開いて問う。
又怕人多不得眠	又人が大勢いて眠れない恐れがある。
眠得一更正是好	一更まで眠れば、ちょっと良い。
眠得二更正是愁	二更まで眠ったら、ちょっと困る。
眠得三更人来捉	三更まで眠ったら、人が捉まえに来た。
又着烏雲飛上天	又烏雲に乗って天に飛んで上がる。
把火来烧五瘟鬼	火を持って五瘟鬼を燃やす。
一時烧了五瘟神	一時、五瘟神を燃やした。
老君捧出階前叫	老君は両手を捧げ、階段の前で呼ぶ。
十分留出一分人	十分の一人の人を留出する。
手把刀頭都殺了	手で刀頭を持って全部殺した。
重留五鬼叫老君	五鬼を再び残して老君を呼ぶ。
聞説今朝有状請	現在招請を聞けば、
張召二郎下壇前	張召二郎は祭壇の前に降りてくる。

文中の「二郎学法在天門(二郎学法在天門)」「老君一聲来度法(老君は一声で法を度しにくる)」「郎行一步祖師抉(郎は一步で祖師が選び出す)」「又行二歩祖師伝(又二歩で祖師が伝授する)」などの字句は、海幡張召二が天門で法を学ぶ様子を描写している。彼に法を伝授するのは、老君あるいは祖師であると考えられる。また、「把火来烧五瘟鬼(火を持って五瘟鬼を燃やす)」「一時烧了五瘟神(一時、五瘟神を燃やした)」「重留五鬼叫老君(五鬼を再び残して老君を呼ぶ)」などの字句は、海幡張召二は五瘟神(鬼)⁴⁸を祓う者としての性格を現している。

さらに、「海幡歌」という題名の記述を取り上げる。

「海幡歌」 ⁴⁹	
起請海幡張召二	海幡張召二を請うことを申し上げる。
聖主打瘟趙后神	聖主の瘟を打つ趙後神である。
南蛇纏頸下海去	南蛇は頸に纏わりついて海へ下って行き、
海水奔波不濕身	波しぶきにも身は濡れず。
回歸得見郎師父	戻ってきたら郎の師父と会うことができ、
脚踏刀梯見■床	脚は刀梯を踏み、■床を見る。
聞説今朝有状請	今、招請を聞けば、
齊々整々降香坛	整然として祭壇に來臨する。

文中の「聖主打瘟趙后神」とは、海幡張趙二郎の瘟神を祓う者としての性格を現しており、前頁で紹介した「海幡張召二」に記されている性格と一致する。また「南蛇⁵⁰」という名称の蛇が記されるが、神画では、海幡張趙二郎は黒龍（黒蛇）に乗る姿として描かれている。神画に描かれている黒龍（黒蛇）は、このテキストの南蛇であろう。また、「脚踏刀梯（脚は刀の梯を踏む）」と記される。刀の梯を踏み上がるシーンは海幡神画に描かれているが、海幡張趙二郎神画に描かれていない。この事例から、大海幡と海幡張趙二郎の二神を同一神として取り扱っていると考える。

第10項 太尉に関する記述

「太尉」という言葉の意味は、中国、古代官職の中で位が最も高い武官のことを指す。神画には、太尉は白馬に乗り、手に剣を持つ武官の容姿として描かれている。太尉と称されるこの神は、間違いなく武官である。太尉について、次に幾つかの記述を通して考察したい。請聖書と賞光書の中では、太尉という題名の歌が全くないので、一つの単独の歌として紹介することはできない。しかし、「賞浪兵頭」「接祖師」などには、太尉と関わりがある記述が見えるため、これらを紹介することを通じ、太尉という神の性格を明らかにしたい。

まず、「賞浪兵頭」という題名の記述である

「賞浪兵頭」⁵¹

去時有功帰有賞	行く時に功が有り、帰れば賞が有り、
後生賞浪我兵頭	若い男子は我が兵頭を賞する。
毎日差兵輪流轉	毎日、兵を派遣し、順番に回る。
未曾冷落我兵頭	未だかつて、我が兵頭を粗末に扱わなかった。
太尉南朝李十六	太尉の南朝李十六、
部兵李十二	部兵の李十二、
通天李十一	天に通じる李十一、
坐壇一堆鬼	壇に坐り一山の鬼
<後略>	

さらに「退下阜老賞浪」の記述を取り上げる。

「退下阜老賞浪」⁵²

去是有功帰有賞	行く時に功が有り、帰れば賞が有り、
後生賞浪我兵頭	若い男子は我が兵頭を賞する。
毎日帯兵乱流轉	毎日、兵を統率し、且つ、往来する。

第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

未存来落我兵頭	未だかつて、我が兵頭を安置せず、
太尉南朝李十六	太尉の南朝李十六、
部兵李十二通天李十一	部兵の李十二、天に通じる李十一
<後略>	

さらに「接祖師」の記述を取り上げる。

「接祖師」 ⁵³	
踏上何勿殿上去	踏み上がって何殿へ行く。
踏上何勿殿上行	踏み上がって何殿で行く。
何勿殿上接靈聖	何殿の上で靈聖を接する。
何勿殿上接靈神	何殿の上で靈神を接する。
踏上梅完殿上去	踏み上がって梅完殿へ行く。
踏上梅完殿上行	踏み上がって梅完殿へ行く。
梅完殿上接靈聖	梅完殿の上で靈聖に接する。
梅完殿上接靈神	梅完殿上で靈神に接する。
太尉南朝李十六	太尉の南朝李十六、
竹葉六郎十六郎	竹葉六郎十六郎、
六郎有錢無沙数	六郎は錢があり(意味は不明)
黄昏洒脚上娘床	夕方に足を洗い、娘のベッドに上がる。
少年胆大亦無■	少年は大胆であり(意味は不明)、
老来修道要焼香	老いてきたら修行して線香を焚き、
一世清齋不吃肉	一生精進して肉を食わず、
未曾遭罪殺猪羊	未だかつて苦しい目にあうことがなく、猪と羊を殺すことはない。
<後略>	

以上に紹介した「賞浪兵頭」「退下阜老賞浪」「接祖師」の三つの記述とも、「太尉南朝李十六(太尉の南朝李十六)」という字句が見られる。注目したいのは、「李十六」という神名である。この李十六という神は太尉であると考えられる。

「賞浪兵頭」「退下阜老賞浪」のはじめには、「去時有功帰有賞(行く時に功が有り、帰れば賞が有る)」「後生賞浪我兵頭(若い男子は我兵頭を賞する)」などの字句が置かれている。よって、この二つの記述は、兵頭(兵の隊長)を賞するために、歌われる歌であると考えられる。内容には、「太尉南朝李十六」と並び、「部兵李十二」「通天李十一」も記されている。この三神とも兵頭であると考えられるが、官階(官職の等級)は異なる。記述中での並び順によって、太尉である李十六の位が最も高く、その次は部兵である李十二、最後は李十一とする。三人とも李姓であるため、兄弟であるかもしれない。

第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

次に、「接祖師」の内容について検討する。「接祖師」は、祖師を迎える歌であると考えられる。記述のはじめには、「踏上何勿殿上去」「踏上何勿殿上行」「何勿殿上接靈聖」「何勿殿上接靈神」「踏上梅完殿上去」「踏上梅完殿上行」「梅完殿上接靈聖」「梅完殿上接靈神」のような問答の字句があり、どこへ行って何をするのか、梅完殿へ行ってそこで祖師を迎えるというようなことを述べている。その次に、「太尉南朝李十六」が出てくるが、この文脈から見ると、太尉である李十六は文中の祖師であろう。

実際に請聖書には、「李十六」という題名がたくさん見られる。そのため、以下に、「李十六呪」という題名の記述を挙げる。

「李十六呪」⁵⁴

奉請通天李十六
啟請仙師少一官
部兵猛将力威勇
急速到壇來助法
五七將軍為大將
統領三千六万兵
世上人民多敬奉
三壇位上有郎名
川起神通天地動
■枷打鎖佩神通
少一部不兵來應
師父作法救人民
父法到壇來接請
行罡脚步不曾停
上帝行前莫行後
便將何法變吾身
開壇接請吾師到
威風凜々鎮乾坤
若有邪師為網魘
收入炉中罪不輕
白衣使者身著祿
速歸本県陀羅弥

通天李十六を請う。
仙師、若い官を請うことを申し上げる。
部兵や猛将たちは威力があり勇敢であり、
急ぎ速やかに祭壇に来て法を助ける。
五七將軍は大將であり、
三千六万の兵士を統率する。
世の中の人々はとても尊敬し祭る。
三壇位上に郎の名がある。
神通が現れて天地も動く。
枷と鎖を叩いて神通を佩く。
部兵統率して応じに来る。
師父は法を作り、人民を救う。
壇を開き、我が師が降臨するのを迎える。
罡歩は止まることなく行く。
玄天上帝は前に、後ろに行くな。
法を使って我身を変ずる。
壇を開き、我が師の來臨を請う。
威風凜々で乾坤を鎮める。
若し邪師は魘魘とならば、
重い罪として炉の中に収め入れる。
白衣の使者は祿を着る。
速やかに本県に帰り、陀羅弥。

この記述は、李十六を描写している。「啟請仙師少一官（仙師、若い官を請うことを申し上げる）」「部兵猛将力威勇（部兵や猛将たちは威力があり勇敢である）」「急速到壇來助法（急ぎ速やかに祭壇に来て法を助ける）」は、記述のはじめに置かれる字句であるが、李十六は勇猛であり、

第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

非常にパワーを持つ武官であることが読み取れる。次の、「五七將軍為大將（五七將軍は大將であり）」「統領三千六方兵（三千六万の兵士を統率する）」という字句は、李十六は兵將を統率する最も位が高い武官であることを現している。「世上人民多敬奉（世の中の人々はとても尊敬し祭る）」「三壇位上有郎名（三壇位上に郎の名がある）」「川起神通天地動（神通が現れて天地も動く）」「■枷打鎖佩神通（枷と鎖を叩いて神通を佩く）」などは、李十六は神通が現れば、天地も動き、威風凛々たる武官であり、さらに世の中の人々に尊敬されている神であることを現している。また、「若有邪師為網魘（若し邪師は魘魘とならば）」「収入炉中罪不輕（重い罪として炉の中に収め入れる）」からは、李十六が邪師を処罰する権限を持つ神であることが読み取れる。

神画に描かれている太尉は白馬に乗り、剣を持っている。彼の後ろに「令」という字が書かれた旗を持つ脇侍が立っている。画面の構成から、太尉は兵士を統率する武官であると見える。神画に描かれている「太尉」と本項で紹介した「李十六」は、いずれも性格が似ており、同じ神であろう。

第3節 儀礼文献から見た神画に描かれる神々

本章では、請聖書・賞光書に収められた神々に関する記述を分析した。過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇・聖主・張天師・李天師・天府・地府・水府・陽間・鄧元帥・馬元帥・大海旛・海旛張趙二郎・太尉・十殿などの神々が、宇宙が混沌としていた時に誕生したことが明らかになった。また、各々の神の生年月日、誕生時刻、衣の色、冠物、持物、乗物などについての詳細が分かり、神々の性格まで記述されていることを明らかにできた。以下、文献記述から判明できた神々に関することを下の表にまとめる。

表 22 儀礼文献から読み取れた神々の情報一覧表

神々の名称	生年月日・誕生時刻	着物の色/冠物/持物/乗物/その他	性格
元始天尊	庚辰年 2月 15日 寅時	黒衣/金冠/宝鏡/蓮の花	法が高く、邪精を滅ぼす勅令者である
靈寶天尊	甲子年 1月 15日 寅時	藍衣・仙衣/金冠/扇子/蓮の花	邪精を滅ぼす勅令者である
道德天尊 〈太上老君〉	洪武年 1月 15日 寅時	龍衣/鏡/白髪	道が高く、邪鬼を滅ぼし、善も知り凶も知る統率者であり、兵を使役できる
玉 皇	己酉年 1月 19日 寅時	黄衣/冕/圭/瑞雲	邪悪を駆除し、正義を正し、兵を使役でき、大堂兵に位置づける
聖 主	丁卯年 7月 15日	黒衣/冕/圭	邪鬼を滅ぼし、大堂兵に位置づける
天 府	戊卯年 5月 15日 午時/	紅衣/圭	

第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

	桂林県で生まれる。		
地 府	己卯年6月/広州府で生まれる。	黒衣	
陽 間	卯辰年3月15日寅時/ 呉州府で生まれる。	紅衣/蓮の花	
水 府	甲午年9月7日午時/ 沙州府で生まれる。	緑衣/冕/圭/金帯	水神である
張 天 師	庚辰年2月9日真昼	八卦模様の紅衣/金冠/ 圭/羅靴	諸々の法ができ、法術が高く、法を伝授する師とし、大堂兵に位置づける
李 天 師	卯子年5月15日寅時	黒衣/亀と蛇/宝剣	法を教える
鄧 元 帥		紅衣/鉞斧/	雷神であり、祭壇を守備し、乾坤を鎮め、邪鬼を滅ぼす
馬 元 帥	小年18日春	紅衣鎧/玉斧	雷神である
關 元 帥		金鎧/鉄鎖	雷神であり、祭壇を守備する
康 元 帥		邪鉄剣/黒青雲	雷神であり、玄帝の部下を務め、魔を収め、邪精を滅ぼす
大 海 番	丙午年8月15日真昼	紅衣・金鎧/脚踏火磚・ 手拿犁頭・口咬犁頭	法を伝授する
海 旛 張 趙 二 郎			五瘟を祓う者とする性格
太 尉	戊寅年12月15日寅時	紅衣/白馬/	法を伝度する祖師である。兵を統率でき、邪師を処罰できる高位武将である
十 殿			陰陽を定め、罪を赦免する
唐 将 軍			上元將軍
葛 将 軍			中元將軍
周 将 軍			下元將軍

表に記されることを述べると、元始天尊は、庚辰年2月15日寅時に生まれ、黒色の衣を着、金冠を冠り、宝鏡を持ち、蓮の花を踏む。法が高く、邪精を滅ぼす性格が見られる。

靈寶天尊は、甲子年1月15日寅時に生まれ、藍色の衣を着、金冠を冠り、扇子を持ち、蓮の花を踏む。邪精を滅ぼす性格が見られる。

道德天尊は、洪武年1月15日寅時に生まれ、龍の模様の衣を着、鏡を持ち、髪の毛が白い。道が高く、邪鬼を滅ぼし、善悪を知る統率者であり、兵を使役できる。

玉皇は、己酉年1月19日寅時に生まれ、黄色の衣を着、冕を冠り、圭を持ち、瑞雲を踏む。邪悪を駆除し、正義を正し、兵を使役でき、大堂兵に位置づけられている。

聖主は、丁卯年7月15日に生まれ、黒色の衣を着、冕を冠り、圭を持つ。邪鬼を滅ぼし、大堂兵に位置づけられている。

第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

天府は、戊卯年5月15日午時に、桂林県で生まれる。紅色の衣を着、圭を持つ。

地府は、己卯年6月に、広州府で生まれ、黒色の衣を着る。

陽府は、卯辰年3月15日寅時に、呉州府で生まれる。紅色の衣を着、蓮の花を踏む。

水府は、甲午年9月7日午時に、沙州府で生まれる。緑色の衣を着、冕を冠り、圭を持ち、金の帯を付ける。水神である。

張天師は、庚辰年2月9日真昼に生まれ、八卦模様の紅色の衣を着、金冠を冠り、圭を持ち、羅靴を履く。法術が高く、法を伝授する師とする存在であると見られる。大堂兵に位置づけられている。

李天師は、卯子年5月15日寅時に生まれ、黒色の衣を着、亀と蛇を踏み、体の横に宝剣が立てられる。法を教える師とする存在であると見られる。

鄧元帥は、紅色の衣を着、鉞斧を持つ。乾坤を鎮め、邪鬼を滅ぼす雷神であり、祭壇を守備する役目を持つと見られる。

馬元帥は、小年18日春の時に生まれ、紅色の鎧を着、玉斧を持つ。雷神である。

關元帥は、金の鎧を着、鐵の鎖を持つ。雷神であり、祭壇を守備する役目を持つと見られる。

康元帥は、邪鉄剣を持ち、黒青雲を踏む。魔を収め、邪精を滅ぼす雷神であり、玄帝の部下を務めると見られる。

大海旛は、丙午年8月15日真昼に生まれる。紅色の衣を着、金の鎧を着、火磚を踏み、犁先を持ち、あるいは犁先を噛む。法を伝授する師であると見られる。

海旛張趙二郎は、太上老君に従って法を学び、五瘟を祓う者であると見られる。

太尉は、戊寅年12月15日寅時に、紅色の衣を着、白馬に乗る。兵を統率し、邪師を処罰できる位が高い武将神である。法を伝授する祖師とする存在であると見られる。

十殿は、陰陽を定め、罪を赦免するという性格が見られる。

唐將軍・葛將軍・周將軍は、それぞれに上元將軍・中元將軍・下元將軍にあたる。

以上から、文献記述から判明したこれらの神々の衣の色・冠物・持物・乗物は、儀礼神画に描かれる内容の読み取りによって作成した異同表(表1～表19)の同項目に示している内容とほぼ一致していることが分かる。しかしながら、これらの神の生年月日及び性格は、儀礼神画に描かれるものではなく、文献記述からしか読み取れないものである。

儀礼文献と儀礼神画は過山系ヤオ族(ミエン)が伝承している儀礼において組み合わせて用いられるものである。神画を用いる儀礼において、祭司は神画を祭壇に掛けてから、必ず神画の前で神々を祭壇に降臨するように招請する「請聖」儀礼を行う。この際に、本章の第2節で取り扱った請聖書に収められる神画に描かれる神々に関する記述などが読誦される。神画を祭壇に掛けることは、儀礼においてどの神が招請されるのか、祭場においてその神の居場所はどこであるのか、またその神はどのような容姿でどの格好であるのかを絵画で示すものである。請聖書に収められる神々に関する記述を読誦することによって、神々が祭場まで招かれて着席し、そこでこれらの神々はいつ、どこで生まれ、どのような格好であり、何を持ち、何動物に乗り、どういう性

第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析

格であるのかを紹介される。こうした儀礼神画と儀礼文献はそれぞれ独立するものではなく、儀礼において両者は互いに補足しながら共同して過山系ヤオ族(ミエン)の信仰している神の世界を現す重要な役割を果たしているのである。

[注]

- ¹ 神奈川大学ヤオ族文化研究所に収集されている、湖南省藍山県の過山系ヤオ族(ミエン)が所持する請聖書の表紙写真資料である。文献番号：A-16b。写真番号：DSC_1983、DSC_1987。撮影者：泉水英計。
- ² 神奈川大学ヤオ族文化研究所に収集されている、湖南省藍山県の過山系ヤオ族(ミエン)が所持する賞光書の表紙写真資料である。文献番号：A-19。写真番号：IMG_2302。撮影者：廣田律子。
- ³ 神々を招請する儀礼である。
- ⁴ 張勁松によれば、上光は師を拝する儀礼で、師郎(学徒)は「上光童子」の身分で師を拝し法を学ぶとする。儀礼は上光・猜光・引光・献光・脱童の諸段に分けて行われるとする。[張ほか 2002:168]
- ⁵ 神奈川大学歴史調査報告書第12集・『中国湖南省藍山県ヤオ族儀礼文献に関する報告Ⅰ』には、2008年11月26日から12月13日までに湖南省藍山県湘蘭村で行われた度戒儀礼の程序について詳細に報告している。程序にそって、度戒儀礼では請聖儀礼(請初夜聖・請中夜聖・請末夜聖)と上光儀礼が行われた。それぞれの儀礼が行われる際に、請聖書と賞光書は儀礼を担当する宗教職能者によって読誦された[廣田ほか 2011:7-24]。また『神奈川大学歴史報告書第14集・中国湖南省ヤオ族儀礼文献に関する報告Ⅱ』には、2011年11月16日から11月21日までに湖南省藍山県所城鎮幼江村で行われた還家願儀礼の程序について詳細に報告している。程序にそって、還家願儀礼では請聖儀礼と上光儀礼が行われた。それぞれの儀礼が行われる際に、請聖書と賞光書が読誦された[廣田ほか 2012:38-51]。
- ⁶ 神奈川大学ヤオ族文化研究所が南山大学人類学博物館での上智大学西北タイ歴史文化調査団の文献資料の調査は、2011年から2012年まで3回実施した。[廣田ほか 2014:164]
- ⁷ 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号9-9。写真番号：DSC_7475~DSC_7480。
- ⁸ 天と地がまだ分れず、混じり合っている状態。
- ⁹ 「羅」の意味は不明であるため、訳していない。
- ¹⁰ 徐整が『三五歴紀』の中で、盤古の天地開闢について記している。欧陽詢が『芸文類聚・上』中で、それを引用し、記述内容は次のようとなる。「徐整三五歴紀曰、天地渾沌如鷄子、盤古生其中。万八千歳、天地開闢、陽清為天、陰濁為地。天日高一丈、地日厚一丈、盤古日長一丈、如此万八千歳。天数極高、地数極深、盤古極長。後乃有三皇。数起于一、立于三、成于五、盛于七、处于九、故天去地九万里」[欧陽 1965:2-3]。
- ¹¹ この記述の中で用いられる「置」とは、世の中になくのもの設立し、作り出す意味であろう。
- ¹² 海の龍神の住むところであろう。
- ¹³ 「竹」は「燭」の同音異字であるため、ここの「竹火」は「燭火」であると考え、灯りであろう。
- ¹⁴ 「同」は「筒」の同音異字であるため、ここの「経同」は「経筒」であると考え、経典を入れる竹筒のことであろう。
- ¹⁵ 「清」と「青」の中国語の発音は同じである。よってここの「清」は同音異字の「青」であろう。
- ¹⁶ 「連」は「蓮」の同音異字であるため、ここの「連花」は「蓮花」であると考え、蓮の花である。
- ¹⁷ 「沙」は「紗」の同音異字であり、「保」は「宝」の同音異字であろう。
- ¹⁸ 「天平」は、水府が冠る冕の上に付けた「冕板」という平の板を指していると考え。ここでは水府が冠る冕を表していると考え。
- ¹⁹ 「京」は「経」の同音異字であろう。
- ²⁰ 「越」は「鉞」の同音異字であると考え。武器の鉞(まさかり)であろう。
- ²¹ 天にある雷神らの役所である「郁都天」を指しているだろう。
- ²² 「庭」は「霆」の書き間違い

- 23 中国語の中で、東「dōng」と彤「tóng」の発音は非常に相似する。よって、「紅東東」は「紅彤彤」であり、真っ赤の意味であると考えられる。
- 24 ここの「街」は、同音異字の「階」であり、閻王らが居る官庁を示していると考えられる。
- 25 ここの「教堂」は、教会堂のことではなく、儀礼を行う祭場を指しているだろう。
- 26 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-32a。写真番号:IMG_4288~IMG_4291。撮影者:廣田律子。神奈川大学文化研究所より発行された、『通訊第3号』「度戒儀礼に見える神々:呉越地方・台湾の民間宗教者の儀礼と比較して」において、松本浩二は請聖書(A-32a, A-20)の神々に関する呪文を日本語に訳し、神々の性格について考察した[松本 2011:24-34]。本節でA-32aとA-20に当たる神々の呪文と歌については、松本浩二の日本語訳を参考することにする。
- 27 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-11。写真番号:IMG_1232s~IMG_1233s-。撮影者:廣田律子。
- 28 「大道」は、三清または高位の神を指していると考えられる。ここでは三清と推察する。
- 29 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-11。写真番号:IMG_1238s~IMG_1239s-。撮影者:廣田律子。
- 30 「戴」は「帯」の同音異字であると考えられる。文中の「帽戴」は帽子の両辺に飾られている紐のことを指していると考えられる。
- 31 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-19。写真番号:IMG_2343s-。文献番号:A-30a。写真番号:IMG_3453s-。撮影者:廣田律子。
- 32 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-11。写真番号:IMG_1239s-。撮影者:廣田律子。
- 33 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-19。写真番号:IMG_2343s~IMG_2344s-、A-30a IMG_3453s-。撮影者:廣田律子。
- 34 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-11。写真番号:IMG_1240s~IMG_1241s-。撮影者:廣田律子。
- 35 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-19。写真番号:IMG_2344s~IMG_2345s-、文献番号:A-30a。写真番号:IMG_3453s~IMG_3454s-。撮影者:廣田律子。
- 36 「身をよく寄せられる」という意味の他に、「姿かたちを好くする」の意味もあろう。
- 37 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-19。写真番号:IMG_2345s~IMG_2346s-、文献番号:A-30a。写真番号:IMG_3454s~IMG_3456s-。撮影者:廣田律子。
- 38 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-32a。写真番号:IMG_4390~IMG_4392。撮影者:廣田律子。
- 39 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-32a。写真番号:IMG_4379~IMG_4382。撮影者:廣田律子。
- 40 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A30a。写真番号:IMG_3442s-。撮影者:廣田律子。
- 41 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-21。写真番号:IMG_3019s-。撮影者:廣田律子。
- 42 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-32a。写真番号:IMG_4320s-。撮影者:廣田律子。
- 43 魁罡は、陰陽家の語であり、魁岡・魁綱と同じ。陰陽家は魁罡が房に在るのを忌む[諸橋 1991:685]。
- 44 『道教大辞典』によれば、雷令は、法具の名称であり、令牌あるいは五雷牌とも呼ばれる。儀礼時神々を招請する際に不可欠な法具である。雷令を使うと、雷神を使役することができ、また魔をよけることもできるという[関ほか 1995:393]。この雷令は、法具ではなく、雷神の法令であろう。
- 45 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-32a。写真番号:IMG_4304s-。撮影者:廣田律子。
- 46 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-32a。写真番号:IMG_4303s-。撮影者:廣田律子。
- 47 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-11。写真番号:IMG_1243s~IMG_1244s-。撮影者:廣田律子。
- 48 五瘟神に関しては、請聖書には、「送五瘟神」という題名の記述があり(神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-31。写真番号:IMG_6160s-。撮影者:廣田律子。)、その内容は「春季

春瘟、夏季夏瘟、秋季秋瘟、冬季冬瘟、一年四季、行瘟使者、行病城隍、天符、地符、遊日遊夜官符、非来官符、横来官符、〈後略〉となる。この記述は、瘟神や病をもたらす神々の名が羅列されている。記述によって、五瘟神は、春の春瘟神、夏の夏瘟神、秋の秋瘟神、冬の冬瘟神、四季行瘟使者であると分かる。

49 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-32a。写真番号:IMG_4375~IMG_4376。撮影者:廣田律子。

50 請聖書には、「南蛇出世」(神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-11。写真番号:IMG_1241s~IMG_1243s-。撮影者:廣田律子。)という題名が収められている。その内容は「斬法地頭架火車、馬山上架龍車、九龍清水苗龍浪、大海中心是我家、世上凡人不得見、張召二郎到我家、聞説今朝有状請」とある。そこから、南蛇は海に住み、世の中の人々は見たことがない神獣であるというように読み取れる。「張召二郎到我家」の字句は、海旛張趙二郎との関係を強調している。

51 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-11。写真番号:IMG_1188s~IMG_1189s-。撮影者:廣田律子。

52 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-19。写真番号:IMG_2372s-。撮影者:廣田律子。

53 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-19。写真番号:IMG_2323s~IMG_2324s-。撮影者:廣田律子。

54 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号:A-32a。写真番号:IMG_4405~IMG_4406。撮影者:廣田律子。